
短 報

マニラ・スラム地区における国際看護学実習の成果 —開発途上国のヘルスワーカーからの学び—

長松 康子¹⁾ 田代 順子²⁾

Outcome of Gloval Health Nursing Practice in Slum in Manila —Learning from Health Workers in Developing Countries—

Yasuko NAGAMATSU RN, PHN, MS, Ph.D¹⁾ Junko TASHIRO RN, Ph.D²⁾

〔Abstract〕

To meet the educational needs of undergraduate nursing students who want to work overseas in the future and to cultivate international awareness, the Department of Global Health Nursing undertook nursing practice in the slums of Manila from 2008 to 2013 for 4th grade undergraduate students.

This practice aimed at 1) adopting the attitudes and suitable manners that enables the students to work with people with different religions, culture and language, 2) learning about the health problems and causes in a developing country from local people and 3) learning ways to prevent danger and health problems. Students practiced primary health care (PHC) such as directly observed treatment short-course (DOTS) for tuberculosis patients, prenatal checkup, community assessment, and health education in English and Tagalog under the supervision of local health workers. To make their practice successful, students made careful and detailed preparation in advance. In six years, 38 students participated in the practice and 19 undertook research for their graduation theses, eight made academic presentations and two graduates worked overseas as nurses.

〔Key words〕 international nursing, medical cooperation, training, primary health care

〔要 旨〕

将来、看護職として国際的に活躍したいという学生の学習ニーズと、看護職をグローバルな視野を有する看護師を育成することを目的に、2008-2013年の5年間にわたり、4学次選択科目「総合看護」として、フィリピン・マニラのスラム地区で国際看護学実習を実施してきた。本実習は、異なる宗教、文化背景および言語を持つ人々と、互いを尊重し合いながら保健活動を行うための基本的な態度とマナーを身に付け、開発途上国の健康問題とその背景にある社会問題をその国の人々から学び、日本とは異なる環境において、健康で安全に目的を遂げる能力を身に付けることを目的としている。事前に綿密な準備を行い、実習中は英語とタガログ語を用いてヘルスワーカーの指導の下で結核治療、妊産婦検診、地域アセスメント、健康教育などのプライマリ・ヘルスケア活動を実践した。6年間で38名が実習を行い、うち19名が総合看護の課題調査を行い、8名がその内容を学会で発表した。すでに2名が海外で看護師として活躍している。

〔キーワード〕 国際看護、医療協力、実習、プライマリ・ヘルスケア

1) 聖路加国際大学 看護学部 国際看護学 St. Luke's International University, Global Health Nursing
2) 聖路加国際大学 看護学部 国際看護学 St. Luke's International University, Global Health Nursing



写真1 バイタルサインの測定と抗結核薬の投与



写真2 スラム地区を巡回



写真3 クリニックで子どもたちへ健康教育

I. はじめに

本学は、1960年代よりインド、バングラデッシュ、ネパールなどの国々を中心に国際医療協力に従事する国際看護の先駆者を輩出してきた¹⁾。近年は、グローバル化が進み、多くの看護学生が、「看護師として将来海外で働きたい」「開発途上国で看護師として人々の健康に貢献したい」という気持ちを持つようになった。実際に看護師として海外で就労するには至らなくても、外国人学生との交流、開発途上国で活動経験のあるワーカーによる講演会、医療協力活動を行うNGOのスタディツアーなどは常にニーズがある。さらには、看護教員の支援と指導のもとに、看護学生として学んだ知識と技術を使って開発途上国で看護体験をしたいという希望を持つ者も多い。このような国際看護におけるアーリーエクスポージャーは、学生のニーズを満たすと同時に、グローバルな看護人材育成に有益である。国際看護学では、2008-2013年の5年間にわたり、4学年選択科目「総合看護」をフィリピンのマニラで実施してきた。

本稿は、6年間のマニラ実習の概要とその成果を報告する。

II. 実習の目的

実習の目的は、以下のとおりである。

1. 異なる宗教、文化背景および言語を持つ人々と理解し合い、支え合う喜びを体験することで、様々な人々を受け入れる広い度量を養い、互いを尊重し合いながら、気持ちよく看護活動を行うための基本的な態度とマナーを身に付ける。

2. 開発途上国で実際に地域の健康問題をアセスメントし、その背景にある社会問題を理解する能力を養う。

3. 健康問題解決のためにヘルスワーカーが実施している活動を実際に見学し、それに応用されているプライ

マリ・ヘルスケアの理論を理解する。

4. 気候、食物、生活水準の異なる環境において、健康で安全に学習する能力を身に付ける。

III. 実習施設と実習内容

1. CANOSSA 修道会 Tondo 保健支援センター

マニラのスラム地区 Tondo にカトリック修道会が運営する保健支援センターで、看護師資格を持つシスターのリーダーシップのもと、常勤の看護師1名、助産師2名および保健ボランティア15名、非常勤の医師、歯科医師およびX線検査技師らが、一般診療、結核クリニック、母子保健クリニック、幼児への教育・栄養プログラムなどを実施している。結核対策を支援している財団法人結核予防会のご協力により、実習をさせていただいている。

1) 結核クリニックにて直接監視下短期化学療法(DOTS)

ヘルスボランティアとともに、結核患者のバイタルサイン測定と投薬を行う(写真1)。クリニック終了後に未受診者の家庭訪問を行った。

2) 一般外来クリニック

患者の問診、バイタルサイン測定、診療介助を行った。

3) 地域アセスメント

スラム地区を巡回し、人々の生活状況と健康に影響を与える要因を観察した(写真2)。

4) 妊婦検診。

妊婦のバイタルサイン、子宮底長および胎児心音を計測し、レオポルト触診法を用いて胎児の位置と姿勢を確認した。

5) 幼児への歯磨き指導

虫歯予防教育を行った後、歯垢を染め出し、鏡を使って歯ブラシの正しい使い方を指導した。

6) 小児予防接種

身長・体重測定、接種の補助を行った。

2. アジア日本総合交流センター (ICAN) Payatas コミュニティーセンター (2008-2009 年)

主にフィリピンの貧しい人や子どもたちへの支援をしている日本の NGO である。本学の実習では、ごみ処分場でごみを拾い売りすることで生計をたてる人びとの居住区にあるクリニックで問診、バイタルサインチェック、診療介助の活動、家庭訪問、子どもたちへの健康教育を行った (写真 3)。

3. 世界保健機関西太平洋地区事務局 (WPRO)

日本人医師や看護技官より WHO の役割について講義を受けた。

4. St. Luke's Medical Centre

マニラで最先端の医療を提供する富裕層向けの医療施設を見学し、フィリピン国内の医療格差を学んだ。また、フィリピン人看護師よりフィリピンにおける看護業務や労働環境について話を聞いた。

IV. 実習の特徴

1. 看護ゼミナールから実習、総合看護、学会発表までの一貫した学び (図 1)

本実習では、看護ゼミナール国際看護の受講を実習要件としている。実習に先立ち、開発途上国の健康問題とその解決のための理論を看護ゼミナールで学ぶ。その後、開発途上国の一つであるフィリピンに実際に出向き、開発途上国の人びとの生活や健康問題を実際に見せていただき、それらの改善のための活動を体験することで、国際看護の理論へと結びつける。また、実習中にある問題を取り上げ、ヘルスワーカーや住民に調査を行うと、フィリピンの人びとの考え方や健康問題が生じる社会問題についてさらに深く学ぶことができる。そこで、希望者には実習中に調査を行い、その結果を総合看護 (卒業論文制作) としてまとめることを奨励している。幼稚園児の身体測定によって、スラム地区の子どもは一般フィリピン人よりも身長が低く、3 分の 1 が栄養不良状態にあることが明らかになった²⁾。

さらにその成果を学会で他者に発表することで、実習における学びがさらに定着することを期待している。

2. 綿密な事前学習

実習中は学習環境が整わないため、実習中に生じた学習課題について調べるのが難しい。また、慣れない環境で体調を崩さないためには、実習終了後は、学習事項を振り返り、翌日の準備をするのが限度である。そこで、限られた実習期間中に最大限の学習効果を得られるよう、日本での準備を綿密に行う。フィリピンの文化、社

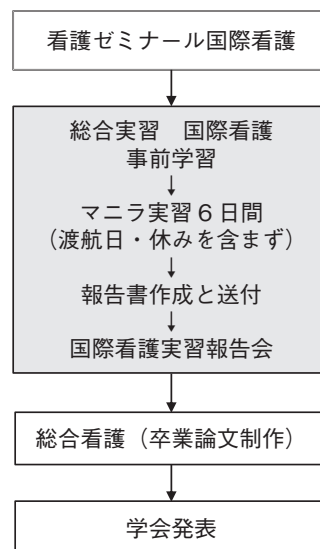


図 1 国際看護学の学び

会・経済、ヘルスシステムおよび一般的な健康問題などを事前に学習する。また、クリニックでの看護診断に必要なフィジカルアセスメントやレオポルト触診法の手法を復習し、タガログ語で行う健康教育の教材作成も実施する。さらに、実習場所ではほとんど英語が通じないので、基本的な挨拶、簡単な自己紹介、一般的な感染症、問診の仕方などを、日本に在住するフィリピン人講師の支援のもとに習得する。

3. 現地のヘルスワーカーから学ぶ

フィリピンでも特に医療アクセスの悪い人びとを支援するヘルスボランティアは、自身も同じ地域に住む貧しい人たちである。シスター看護師の指導のもと、喀痰検査、投薬と注射、家庭訪問を一日も欠かさず行う。ヘルスボランティアの話を聞き、活動を手とり足とり教えてもらうことで、学生は地域の問題や解決策を学ばせていただき、ヘルスボランティアは学生に教えることで活動に対する動機付けを高める。例を挙げると、実習で行った幼児のう歯調査³⁾によって、診療実習施設の歯科クリニック受診者が増加し、実習で始めた歯ブラシ指導は、歯科医師とヘルスワーカーによって継続されている。石川⁴⁾は、プライマリ・ヘルスケア (PHC) における外部者の役割は、地域の人びとと共に学び、相互にエンパワーを起こすことだとしている。本実習は、フィリピンのヘルスワーカーと共に学び合う喜びを体験させることで、国際看護の専門職として不可欠な姿勢を養う機会としている。

4. 国際看護を学ぶ者としての態度の育成

実習では、お礼状の送付、実習報告書作成および結核予防会での報告会までを学生が主体的に行う。また、すでに述べたように実習中はタガログ語で挨拶や自己紹介

を行う。言葉や文化の異なる人々が共に働く国際看護の場では、誤解や齟齬を生みやすいからである。知らない専門職が集まって短期間に成果を出さなくてはならない、あるいは自分一人で外国の人びとの生活に介入しなければならないことの多い国際看護の場では、初めて会った人には自分から挨拶と自己紹介をし、お世話になった方にはすぐにお礼状を送り、報告に何うという基本的な態度が役に立つからである。さらに、住民が大切にしているキリスト教の礼拝に参加する。これは、自分の宗教のいかに関わらず、相手を尊重する姿勢を身に付けるためである。

V. 成果

1. 履修者数

マニラで38名が実習を行い、うち19名が調査を行って総合看護の研究課題とし、8名がその内容を聖路加看護学会と日本国際保健医療学会で発表した。1名が英国で養護教諭となり、もう1名は海外青年協力隊員として開発途上国に赴任中である。

2. 学生からの評価

学生からの実習に対する意見は概ね良いものであるが、少数ではあるが、渡航費用を含めると高額な費用がかかることなどについて改善の要望があった。限られた期間で最大限に学習効果を得つつ、安全を確保しながら、費用を抑える努力をしている。

3. 実習受け入れ施設看護師からの評価

どの実習施設からも、学生の学問的資質の高さと看護を学ぶ者としての真摯な態度について高い評価を得た。住民からは、礼儀正しい、住民の気持ちを理解しようとする、住民のために尽力したいという態度が伝わるというコメントを頂いた。ヘルスボランティアからは、指導に対して感謝と尊敬の念を感じるので教え甲斐がある、自分たちの活動を評価してもらえることが嬉しい、現地の看護学生よりも積極的であるとの評価を得た。さらに、シスター看護師からは、地域の新しい問題の発見や、それに対する新しい活動へと発展させる点が評価された。

VI. 教員の役割

カンボジアで看護教育を行ってきたメイ・イノ氏が、「知識やスキルは与えるものではなく、自分が獲得するもの」⁵⁾としたように、教育の重要な役割の一つは、学生が最大限に学びを得られるようにファシリテートすることである。海外の実習では、言語、文化、看護師の役割の違い、健康問題等の違いなどが学習のバリアとなる。

これらの違いを乗り越えるために事前学習を課す。また、これまで習得してきた知識やスキルを活かしたとき、学生は喜びを感じ、自信を持ち、学びを確かなものとするので、実習中は常に気を配り、学生が知識とスキルを発揮できるチャンスを窺っている。褥瘡のケアや脳卒中患者のリハビリなど、これまでの実習で経験したケアを予定外で行わせていただいた際は、ヘルスワーカーからその技術の高さが評価され、学生にも好評であった。一方で、とするとヘルスワーカーの見せたいものを見学して終わる危険性もある。学生の学習目標に合った実習内容となるように、実習受け入れ施設と綿密に話し合い、実習の意図を理解してもらうのが何よりも重要である。

もうひとつの重要な役割は、安全の確保である。もともと外国人旅行者は犯罪に巻き込まれやすい上、気候や食べ物の違う外国では体調を崩しやすい。本実習履修者は実習前より体調管理を行い、予防接種を受け、各自常備薬を持参した。実習中に体調を崩した者は、すぐに申し出させ、療養させた。さらに開発途上国では、交通事故が何にもまして危険なので、専用の車両とドライバーを調達した。

謝 辞

本学の実習にあたりフィールドをご提供くださいました結核予防会の皆様、マネージメントをご担当くださいましたRIT/JATAマニラ事務局の皆様、学生たちの発表に対して温かいコメントをくださいました石川信克先生、CANOSSA修道会のシスター、ヘルスワーカーの皆様、ICANの野村ゆき様、St. Luke's Medical Centreの大場康弘様、WPROのCathalene Flitsi先生、錦織信幸先生、大菅克知先生、中川淳先生、高島義裕先生、学生にタガログ語をご指導くださいましたJudy Chonan先生に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 田代順子. (2012). グローバルヘルスニーズの変遷と日本の国際看護を拓く. 聖路加看護学会誌 16(1), 20-23.
- 2) 光成真理子, 長松康子. (2011). フィリピン都市部スラム地区のH幼稚園児の栄養状況に関する研究. 聖路加看護学会誌 15(3), 46.
- 3) 武井奏子, 長松康子. (2010). フィリピンスラム地区在住の子どもたちのう蝕に関する調査. 聖路加看護学会誌 14(3), 67.
- 4) 石川信克. (2014). 時代を超えて変わらないプライマリ・ヘルスケアの原則 バングラデッシュでの経験から. 国際保健医療 29(2), 93-101.
- 5) 林かぐみ. (2014). 草の根の人々の健康のために—変化の中で変わらないリーダーの役割を考える. 国際保健医療 29(2), 128-130.